

類義語と本文異同

——源氏物語における「にる」「かよふ」——

中村一夫

一 類義語の異同から何を考えるか

源氏物語の一つではない。この物語の諸伝本の本文を読み比べると、異同箇所がいくつも目につく。たとえば花宴巻巻末の光源氏と朧月夜の贈答歌のくだりには、類義語に関わる異同が確認できる。¹

【資料1】光源氏と朧月夜の贈答歌

いらへはせて、たゞとき／＼うちなけくけはひなるかたによりかゝりて、き丁こしに手をとらへたまで、

「あつさゆみいるさのやまにAまよふ哉ほの見し月のかけや見ゆると

なにゆへか」とをしあてにの給に、えしのはぬなるへし、

「こゝろいるかたならませはゆみはりの月なきそらにBまよはましやは」

といふこそ、たゞそれなり。うれしきものから。(花宴・尾州家本)

A まよふ(尾麦阿天) まとふ(大陽池国肖三伏穂保前宮御)

B まよはましやは(大陽池国肖三伏穂保前尾麦阿天) まとはましやは(宮御)

偶然の邂逅によつて知り合うことになつた女性を、光源氏は見つけ出すことができた。資料Iに掲げた光源氏と朧月夜の歌には、両者の気持ちと呼応するかのようにも、「まよふ」が使用されているが、実はすべての伝本で一致した形になっているわけではない。源氏物語の読者に広く知られているのは、「あつさゆみいるさのやまにAまとふ哉ほの見し月のかけや見ゆると」(大島本)という別の本文であろう。つまりこの箇所には「まよふ」と「まどふ」という類義語による異同が存在するのである。この異同について、かつて次のように述べたことがある。²⁾

青表紙本系諸本は「まどふ」から「まよふ」に移行しているという形で一致している。それに対して河内本系諸伝本および別本では「まよふ」「まどふ」が二首の間でいずれかに揃えられている。(中略)ただこれをもつてどの本文のありようが正しいとか古いとかということは、到底決められるものではない。考えるべき点は、異同をみせる「まよふ」と「まどふ」が等価交換可能な語義や表現価値を有しているのかということであるが、同じ時代に共存して使用されていることから、当然異なるものを持つてはいるはずである。ならば、それによつて二人の関係や相手への態度、心情をどう解釈したらよいのかという問題に連なつていくことになる。そしてそれぞれ³⁾の表現を選び取つた各伝本の論理はどういうものであるかということも、合わせて考える必要がある。

そして「まよふ」「まどふ」に関する先行研究の状況を踏まえて、

多数の用例から帰納した平均的な語義としては、右に確認したこれまでの先学の指摘に従えばよいのであろうが、一方で具体的な本文の解釈となると、どうしても齟齬する用例が生じてくる。つまりこうした精緻な先学の研究成果をもつてしても、なぜ花宴巻の「まどふ」と「まよふ」の異同が発生するのか、そのメカニズムを解き明か

す手がかりはいっこうに得られないという現実があるのであった。源氏物語の異文に直面する我々の解き明かすべき課題は、両語の平均的な語義を明らかにすることにあるのではなく、まさに各伝本の論理に導かれた生きた表現としての特質の解明であった。

とも述べた。いささか引用が長くなつたが、本稿における立場に関わるものであるため、ここにそのまま記した。本稿では、源氏物語にしばしば現れるこの種の類義語——具体的には「にる」と「かよふ」——による異同箇所注目し、そこに見える語の意味と表現しようとするものについて考察を加え、それぞれの表現価値が物語の論理とどのような関わりを持つているのかについて、報告する。

二 問題の所在 「にる」と「かよふ」の異同

源氏物語には「似ている」ということを表すために「にる」「および」「かよふ」という語が用いられている。「両語の個別の使用状況その他については後ほど触れることにするが、諸伝本の本文を並べて読み進めると、いくつかの箇所に対立するかのような異同を見ることがある。まずはこの物語における「にる」と「かよふ」の異同箇所を掲げることとする。資料2・3・4に両語が対立する形で異同を見せる用例を列挙した。今回調査に使用した資料から得られた異同はこの三例であった。

【資料2】浮舟と今は亡き大君の比較

としころはよにやあらむともしらさりつる人の、この夏ころとをき所よりものしてたつねいてりしを、うとくはおもふましけれど、またうちつけにさしもなにかはむつひおもはんとおもひはへりしを、さいつころきたりしこ

そ、あやしきまてむかしの人の御けはるに、たりしかはあはれにおもひなりにしか。
(宿木・陽明文庫本)

かよひたりしかは(大保国宮阿三尾)

【資料3】薫の和琴の爪音と故致仕大臣のそれの比較

かんのきみ、「こちしのおとゝのつまをとになん、いとよくにたまへるときゝわたるを、まめやかにゆかしくな
ん、こよひはなをうくひすにもさそはれ給へ」といひいたし給へは(竹河・国冬本)

かよひ(大保善麦阿尾陽)

【資料4】故大君と中君の容姿の比較

いとさかりに、ほひやかなるおほむかたちの、すこしほそやきたまえるしもあてなると、まさりてすこしおもほ
えたまひ(に補入)たり。さしならひたまへりし(おり補入)は、とりくにてかよひたまはざりしを、うちわ
すれてはそれかと思わたされたまふに(早藤・保坂本)

に(大陽麦阿京尾) 似(国)

資料2は、二条院を訪ねてきた薫と対面する中君が、異母妹である浮舟の存在を遠回しにほめかす宿木巻のくだ
りである。「奇妙なほどに今は亡き姉君の様子に似ていた」とするところ、陽明文庫本では「にる」が使用され、他

の伝本では「かよふ」が使われている。次の資料3は竹河巻からで、かねてより薫の和琴の爪音が故致仕大臣のそれと「よく似ている」ことを聞き及んでいた玉鬘が、この機会にぜひひとと所望するところである。故致仕大臣は薫にとって実の祖父であるものの、その関係は秘すべきものである。物語としては緊迫した場面であり、ここでの使用もそれと連動する形で解釈すべきであるが、ひとまずそのことはおいておく。両者の爪音の似ていることを諸本が「かよふ」とするところ、国冬本では「にる」としているのであった。続く早蕨巻巻頭にみえる資料4は、一人生き残つた中君の容姿を、亡くなつた大君のそれと比較するものである。ここでも諸本が「にる」とするところ、保坂本では「かよふ」が使用されて、異同が発生している。

いずれも現代語で解釈をしてみましょうと、「似ている」という一語ですまされてしまうようなものであり、どちらで理解しようとする問題はなさそうに思われる。しかしながら、類義語というのはまさにその名が表すとおり、「類義」の関係にあることから、その意味のズレや違いをはつきりと意識し、伝本が内包する論理と関わらせながら解釈に生かさなければならぬと考える。室伏信助は諸本間の本文や表現の違いについて、次のように述べる。

原作者の表記がどうであつたかということは最早証明不可能な事柄だということをもつと徹底して考えれば、源氏物語の現存諸本はすべて後世の書写者の遺産と考えるべきで、そうなればそれぞれの伝本に付与された表記は各個に読解されるべきで、それは同系統・同分類とされた諸本間の異同についても言えることなのである。煎じ詰めて考えれば、個々の伝本に凝縮した表記は単純に生じた結果ではなく、読むという行為の必然として選び取られた成果なのである。

（「源氏物語の本文」、「国文学」一九九五年二月、のち『王朝日記物語論叢』二〇一四年、所収）
首肯すべき見解である。

しかしながら、ことさらに言うまでもなく「にる」「かよふ」ともに解釈に困難を伴う語ではない。そのためか、『日

本国語大辞典 第二版（小学館）や『古語大辞典』（角川書店）をはじめとして、各種の古語辞典、国語辞典の類には特筆すべき記述は見当たらない。その中であつて、森田良行編『基礎日本語辞典』（一九八九年）と大野晋編『古典基礎語辞典』（二〇一一年）では「にる」の含み持つ表現価値に関する指摘が存していた。

A・B異なる二つの（もしくは二つ以上の複数の）事物・事象が互いに同じような状態にあるさま。（略）「似る」という以上、A・Bは全く異なるもの同士で、本来違つてはいるはずなのに、ある面で共通した部分を兼ね備えており、それを主体が、両者にあまり違いがないと判断しての表現である。当然、主観的な判断となり、個人差が大きい。「にる」、『基礎日本語辞典』、傍線は稿者による、以下同じ）

オボユの類義語ニル（似る）は、本来二者の外貌が同じように見えるという造形上の具体的な類似を表す。オボユは感覚的類似をいい（中略）、実際には外見の似ていない二者の間で使われている。『源氏物語』に限らず、人物の感じが似ている意でオボユが使われるのは、基本的にその二人に血縁があることを示唆する。（「おぼゆ」、『古典基礎語辞典』）

これらの記述からうかがえることは、「にる」の表そうとするものは、「本来は別物」であるはずの二者が、外見の面で同じように見える何らかの類似性を有しているという点である。ただし両書ともに「かよう（かよふ）」を類義語として取り上げることとはなく、いかなる差異があるかは明らかにされてはいない。

一方、「にる」「かよふ」に関する先行研究についても、藤川照三・森脇茂秀・柳椿姫らの論考を見出すことができるもの^⑤、おおむね源氏物語を中心とした使用例の列挙とそれらの運用面での特徴、文法の面からの接続関係のあ

りよう、そして個別用例の文学的な解釈に忙しく、類義語を捉える上で最も重要であると考えられる周辺の意味、すなわち語の表現価値やニュアンスなどに言及するものは、必ずしも多くはない。これらの論考の中で指摘されている点については、後で検討を加える諸例を掲げる際に触れたいと思う。

次章以下では、右の用例に現れる異同を合理的論理的に解釈すべく、源氏物語における「にる」と「かよふ」のそれぞれの語義と表現価値を具体的に考えることにする。

三 「かよふ」の表す共通性

いったい大島本における「にる」は一二七例が数えられ、一方「かよふ」は八七例のうち一七例が「似る」の意で使用されている。この使用数がどれほどのものであるか、比較のために奈良時代から鎌倉時代までの文学作品における両語の使用状況を、宮島達夫編『日本古典対照分類語彙表』(二〇一四年)によって示すと、表一のようになる。⁶⁾

【表一】他の作品の使用状況(宮島達夫編『日本古典対照分類語彙表』)

| | にる | かよふ |
|----|----|-----|
| 漢字 | 似 | 通 |
| 徒然 | 17 | 6 |
| 平家 | 26 | 27 |
| 宇治 | 18 | 10 |
| 方丈 | 4 | 0 |
| 新古 | 9 | 15 |
| 大鏡 | 3 | 5 |
| 更級 | 4 | 0 |
| 紫日 | 4 | 1 |
| 枕草 | 21 | 3 |
| 蜻蛉 | 9 | 19 |
| 後撰 | 5 | 10 |
| 土佐 | 6 | 1 |
| 古今 | 2 | 9 |
| 伊勢 | 4 | 7 |
| 竹取 | 3 | 0 |
| 万葉 | 13 | 61 |

表一でうかがえるように、これらの作品と比較すると、作品の長短の差はあつたとしても、源氏物語における「にかよふ」の使用数の突出していることが知れよう。つまり、それほどまでに何かと何かが「似ている」ことが、この作品において語られるということである。これら二つの語がいかなる違いをもつて何を意味し、それが物語の論理とどのように関わっているのだろうか。

「かよふ」は右に述べたとおり、八七例中一七例が「似る」という意で用いられている。大半のものは本来の「二つの場所や物事の間を何回も行き来する」「物事が一方から他方へとどく」（『日本国語大辞典第二版』）という意で使用されている。いくつかを以下に示す。

【資料5】

頭中将なん、また少将にもし給し時、みそめたてまつらせ給て、三年はかりは心さしあるさまにかよひ給しを
(夕顔・大島本)

「(略)かへりては心はつかしけなる法のともにこそはものし給なれ」などのたまひて、かたみに御せうそこか
よひ、みつからもまうて給ふ。(橘姫・大島本)

よのまつりこと、御心になはぬやうなり。わつらはしきのみまされと、かむの君は人しれぬ御心しかよへは、
わりなくてとおほつかなくはあらず。(賢木・大島本)

資料5の一つ目は夕顔巻からのもので、頭中将がまだ少将であつた頃に見初めた夕顔の所へ三年ほどは深い愛情をもつて通つてゐるといふことである。次の橘姫巻の用例は、八の宮が薫と手紙のやり取りなどをし、互いの交流を深めていつた経緯を語るものである。そして三つ目は、桐壺院崩御後の苦境であつても、これまでと同様に朧月夜と

心を通わせる光源氏の姿が語られている。これらは、恋人のところへ通う、手紙が通う、心が通うという意で用いられており、「かよふ」の本来の意の範囲に収まるものである。

こうした文字通り「行き来する」「届く」という具体的な事象を表す「かよふ」の用例がある一方、抽象的に二項のとある状態や様子に共通点があり、その共通する特徴によって結びつけられるという「かよふ」にはどのような用例があるのか、次に示す。

【資料6】紫上と藤壺（光源氏の思い）

「さらはそのこなりけり」とおほしあはせつ。「みこの御身にて、かの人にもかよひ給つるなりけり」とおほすに、いとゝあはれにみまほしくおほさる。（若紫・陽明文庫本）

【資料7】春宮（のちの今上帝）と女三宮（柏木の思い）

春宮にまいり給て、ろなうかよひ給へる所あらむかしと、めとゝめてみたてまつるに、にほひやかにとはあらぬ御かたちなれと、さはかりの御ありさま、はた、いとことにて、あてになまめかしくおほします。（若菜下・大島本）

【資料8】大堰と明石（光源氏への惟光の報告）

「あたりおかしうて、うみつらにかよひたるところのさまになむはへりける」ときこゆれば、「ぎやうのすまゐによしなからすはありぬへし」とおほす。（松風・大島本）

資料6は僧都から紫上の素性を聞いた源氏の思いを語るもの。血筋が同じであるという点から藤壺に「似ている」というのを「かよふ」で表している。まさに両者が通じているということをよくうかがわせる用例であろう。次の資料7、柏木が春宮のところに参上した折に、同じ父を持つもの同士であるから間違いない女三宮に「似ている」ところがあるだろうと期待するものである。これも兄と妹という強い関係性が「似ている」ことの根拠となっている。資料8は右の二つとは違い、人物以外のものを引用した。明石から大堰に移り住んだ明石君一行のことを惟光が源氏へ報告しているものである。海と川という違いはあれど、大堰がかつて住んでいた明石に「似た」風光明媚な土地であるとの言から、二つの土地が共通の属性を有する場所であることを知らせている。なお柳（一九九六）には、「これまで『源氏物語』におけるいわゆる『似る』の意と解される『通ふ』を中心とし検討してみた。『通ふ』は対象等に共通点があることを示し、場合によつては、『似る』の前提となるものであった」との指摘があつた。

さて、右の三例を含め、「似る」という意で使用される「かよふ」が、何と何をそのように認めているかを整理したものが下表である。これによると、人と人を比べているものが大半を占めているのが明らかである。具体的には左のような組み合わせとなる。比較される人物名と使用数を、それぞれ括弧でまとめた。

| | |
|-------|----|
| かよふ | 数 |
| 人と人 | 13 |
| 人と物 | 1 |
| 場所と場所 | 1 |
| その他 | 2 |

〔浮舟〕大君 3〕〔紫上〕藤壺 2〕〔冷泉帝〕光源氏 2〕〔藤壺〕桐壺更衣 1〕〔空蟬〕小君 1〕〔春宮〕
〔今上帝〕女三宮 1〕〔薫〕頭中将〔故致仕大臣〕 1〕〔薫〕匂宮 1〕〔中君〕大君 1〕
ここで気が付くのは、全十三例のうち十一例が何らかの血縁関係で結ばれる者同士であるということである。しかも「かよふ」で結びつけられている両者、すなわち共通する属性を持つとされる人物たちの組み合わせの大半は、その関係性（血縁にせよ、それ以外にせよ）において、物語の中で重要なテーマを担うものであつた。この中で桐壺更衣と藤壺の組み合わせが見られるが、周知の通り血縁とは認められない。しかし、「かよふ」によつて明示される二

人の共通性は、血縁ではないという事実を凌駕するほどの強い結び付きを逆に意識させることになるだろう。「かよふ」で「似ている」ことを認定しつつ、何らかの共通性を保持する特別な関係として結びついていることを確認し、それが物語の展開に大きく寄与していると考えられるのである。宿木巻で三回繰り返される浮舟と大君の「かよふ」もまた、まさしくそのような働きをする。

【資料9】浮舟と大君（薫への中君のことば）

さいつ比きたりしこそ、あやしきまでむかし人の御けはひにかよひたりしかは、あはれにおほえなりにしか。

（宿木・大島本）

「かよふ」というキーワードで繰り返される浮舟と大君の共通性によって、薫の関心が中君から浮舟へと転換していったのは、この物語の読者の誰しも知るところであろう。「かよふ」において考慮すべき表現価値は、比較される二項がまさにある属性をもって「通じている」「通い合う」という共通性に他ならないと考えられる。それは「かよふ」の本来の意「二つの場所や物事の間を何回も行き来する」「物事が一方から他方へとどく」を外れるものではなかった。

四 「にる」の表す独自性や卓越性

ではもう一方の「にる」はどうであろうか。大島本に出現する「にる」もまたその多くは人と人の間で使用されているが、全一二七例中二〇例は人以外のものにも使用されていた。

【資料10】北山の景色と絵

はるかにかすみわたたりて、よものこすへそこはかとなうけふりわたれるほど、「ゑにいとよくもにたるかな。かゝる所にすむ人、心におもひのこすことはあらしかし」との給へは（若紫・大島本）

【資料11】明石姫君の裳着のために用意されるもの

故院の御よのはしめつかた、こまうとのたてまつれりけるあや、ひこんきともなど、いまの世のものににす。なをさま／＼御らむしあてつゝせさせ給て、このたひのあやうすものなどは、人々に給はず。（梅枝・大島本）

右の二つの用例をはじめとして、庭・邸・花・景色・空模様・松風・衣装・薫物・贈物・儀式などに用いられていた。大半が人と人を比べている「かよふ」とは異なる点である。いずれも本来はまったく無関係の二項が現象的に「似ている（あるいは似ていない）」事実を確認するものであった。柏木巻では、女三宮が柏木からの手紙を片付けもせず散らしていたところ、光源氏に見つかつてしまうくだりで、小侍従が宮に対して「昨日のものはいかゞせさせ給てし、けさ院の御らむしつるふみの色こそにて侍つれ」と、本来は「別物」であるはず（あつてほしい）の「柏木の文の色」と「光源氏の見ていた文の色」が「似ている」ことを語っているものもある。この例なども、比較する二項に対して、「通い合う」という共通性を印象づける「かよふ」とは、異なる捉え方をしていることがうかがえる。では百を超える用例を見せる人物ではどうなのか。まずは三例を掲げることにする。

【資料12】朱雀帝と故桐壺院

そのよ、うへのいとなつかしうむかしものかたりなしたまひし御さまの、院にゝたてまつり給へりしも、恋し

く思いできこえ給ひて（須磨・大島本）

【資料13】光源氏と新皇子（後の冷泉帝）

物かたりなどして、うちゑみ給へるかいとゆゝしううつくしきに、我身なからこれに|たらむは、いみしういたはしうおほえ給そ、あなかななるや。（紅葉賀・大島本）

【資料14】生まれたばかりの若君（夕霧）と春宮（後の冷泉帝）

わか君の御まみのうつくしきなどの、春宮にいみしうに|たてまつり給へるをみたてまつり給ても、まつこひしうおもひ出られさせ給にしひかたくて、まいり給はむとて（葵・大島本）

これらの視点人物はいずれも光源氏である。まず資料12では、流謫の地である須磨で、源氏が兄朱雀帝の昔語りをする様子が今は亡き父桐壺院に「似ている」ことを思い出している。資料13は藤壺の産んだ新皇子を初めて見た光源氏が、わが身のことでありながら、この子と「似ている」ことを誇らしく思っているものである。資料14では、葵上の産んだ子（夕霧）のかわいらしさが、春宮（後の冷泉帝）にたいへんよく「似て」おり、それを見るにつけても春宮が恋しく思われると語られる。

右の三例を含め、人物間で「にる」が用いられるのは、「かよふ」と同様に血縁関係にあるものが中心となる。「にる」が単独で使用される限りにおいては、「かよふ」との違いを見出だすのは難しい。しかしながら、「かよふ」が表そうとする共通性（通い合う属性を強調）を確認するというよりは、先に示した「本来二者の外貌が同じように見える」という造形上の具体的な類似を表す（『古典基礎語辞典』）という「にる」の性質を強く印象づけている。そして

このことは、「にる」の運用に着目することにより明確になる。それは共起する表現である。

「かよふ」は特定の表現と共起することはなかった。それに対して「にる」には共起する特定の表現が目につくのである。この共起する表現の性質を見ていくと、「にる」の表そうとする表現価値の一端がうかがえるとおぼしい。一二七例の「にる」とともによく用いられる表現を下表にまとめた。見られるように、「いとよく」「世」、そして各種の否定表現がともに使用されている。注目すべきは一二七例のうち七割を越える九〇例が否定表現と共起していることである。つまり「似ていない」ことを主に述べようとしている。各種の否定表現は他に似るものや並ぶものがまったく存在しないことを表す。さらに一八例が確認できる「世」は、「世にくず」などのように、これもまた否定の表現とともに現れて、

他に「似るものがない」対象の独自性をうかがわせる。一方「いとよく」は「とてもよく似ている」と二項の類似性をより強調するものである。これらの「他に似るものがないこと」と「とてもよく似ていること」は一見相反するよう思うのであるが、実はそうではなく、同じ表現価値を強く印象づけるものとして機能している。結論をやや先取るように言えば、類似する対象の独自性や卓越性が問題にされているとおぼしい。「にる」は単に「似ている」という現象を表しているのではない。

以下、具体的に用例を見ていく。

【資料15】 「いとよく」と共起する「似る」

は、みやす所もかけたにおほえ給はぬを、「いとよくにたまへり」と内侍のすけのきこえけるを（桐壺）

〔藤壺〓桐壺更衣〕

つらつきまみなどはいとよくにたりしゆへ、かよひてみえ給ふもにけなからすなむ（桐壺）〔桐壺更衣〓光源氏〕

| | | |
|------|----|-------|
| にる | 数 | |
| いとよく | 15 | |
| 世 | 18 | 否定と共起 |
| 否定 | 90 | |

さるは、かきりなう心をつくしきこゆる人にいとうようにたてまつれるか、まもらるなりけり、とおもふにも、なみたそおつる。(若紫) [紫上||藤壺]

御かたちも、院にいとうようにたてまつり給て、いますこしなる(る見消ま)めかしきけそひて、なつかしうなこやかにそおはします。(賢木) [朱雀帝||故桐壺院]

内のおへなむいとよようにたてまつらせ給へりと人々きこゆるを、さりともおとり給へらむとこそをしはかりはへれ。(朝顔) [冷泉帝||光源氏]

つゝましけにいひけち給へる程、なをいとよ^う似給へるものかなと思にも、まつそかなしき。(宿木)

[中君||大君]

いかてかうしもありけるにかあらん。こ宮にいとう^うにたてまつりたるなめりかし。(東屋) [浮舟||故八宮]

宮は、女君の御さまのいとよ^うにたるをあはれとおほして(蜻蛉) [中君||浮舟]

資料15には「いとよく」と共起する「にる」を掲げた。いずれの用例も「いとよくにる」で結びつけられるのは、物語において中心的活躍をする人物ばかりである。それぞれの人物の組み合わせを括弧内に整理したが、「前者が後者に似る」という形になっている。たとえば、母の記憶を持たない光源氏がお付きの者から藤壺が亡き母にたいそうよく似ていると聞かされる、北山で見つけた少女に無性に心が惹かれるのは密かに思いを寄せる藤壺にたいそうよく似ているからだと気付く、さらにはこの度現れた腹違いの妹浮舟が亡き父宮にたいそうよく似ているなどである。これらの用例は、すでに高く評価されている比較対象に「似ている」ことを「いとよく」でさらに強調すること、もう一方の卓越性や独自性を保証し際立たせると考えられるだろう。なおこれと同じ働きをするものとして、他には「いみじ」「ことた」なども共起していることを言い添えておく。

では否定の表現と共起する場合はどうなのか。

【資料16】否定表現と共起する「似る」その1

いと心やすくうちゑみて、つふく〜とこえてしろううつくし。大将などのちこをひほのかにおほしいつるには、

に給はず。(柏木)〔薫々夕霧〕

おとゝはねひまさりたまふまゝに、二院にいとようこそおほえたてまつり給へれ、この君はに給へる所もみえ給はぬを。(竹河)〔薫々光源氏〕

資料16には薫をめぐる用例を引いた。一つ目は女三宮が出産した赤子(薫)が光源氏の記憶の中の赤子(夕霧)とは似ていないことを語る。二つ目は、今は大臣となった夕霧が亡き父である光源氏によく似ている一方で、薫は似ているところがないとされる。いずれも物語における過去の密事を思い起こさせる描写であるが、注意すべきは「似る」が否定されること——似ていないこと——で、光源氏一族とは異なる薫の独自なありようを示しているということである。このように誰かに「似ていない」ことで独自性を際立たせることは、次の資料17以下の用例を見ると、さらにはつきりとしてくる。

【資料17】否定表現と共起する「似る」その2

中に十はかりやあらむ(と補入)みえて、しろききぬ山ふきなどのなへたるきて、はしりきたる女こ、あまたみえつることにもにるへうもあらず。いみしくおいさきみえて、うつくしけなるかたちなり。(若紫)〔紫上〕

さらにこゝらみれと御ありさまに、たる人はなかりけり。(若菜下)〔紫上〕

かきりもなくらうたけにおかしけなる御さまにて、いとかりそめに（補入世を）思給へるけしき、にる物なく心くるしくすゝろにものかなし。（御法）〔紫上〕

けちかくうちとけたりし、あはれににる物なく恋しくおもほえ給ふ。（末摘花）〔夕顔〕
はなやかにさしいてたるゆふつくよに、うちふるまひ給へるさま、にほひににるものなくめてたし。

（賢木）〔光源氏〕

資料17も16と同じことをうかがわせるものである。紫上の美や性質、人柄などを描写する中に、他に「似る」ものがまったくないとするところから、彼女のこの物語における特別な存在感を印象づけている。とりわけ初めて登場する若紫巻の「あまたみえつることににるへうもあらず」は、光源氏に鮮烈な印象を与え、後の展開への大いなる推進力となった。続く二つの用例、光源氏が耽溺した夕顔や光源氏の最上の美質を語るものも、彼らの属性や卓越性を強調するものとして働いている。右のものも含め、「にる」に否定の表現が共起する場合、特定の人物に似ていないと語るのでなく、他に似るものがないとされるものがほとんどである。

【資料18】否定表現と共起する「似る」その3

「いとうれしきことなれと、よににぬさまにて、なにかは。かうなからこそ、くちもうせめとなむ思はへる」とのみのたまへは（蓬生）〔末摘花〕

世ににぬひかものなるおやのきこえなとこそくるしけれ。（薄雲）〔明石入道〕
よの人にもにぬ御ありさまを見たてまつりはてんとこそは、こゝら思ひしつめつゝすくしくるに

（真木柱）〔髭黒の北の方〕

資料18には「世」とともに用いられる「にる」の用例を掲げた。「世」は先に述べたとおり、否定の表現とともに使われており、これが「にる」と組み合わせられると、「この世に類がない」「このうえない」という意となる。資料16に掲げたような単独での否定表現より、さらに強い意が加わる。ここでは、なにもものにも「似ていない」ということが特別な評価（プラスにもマイナスにも）に繋がっているとおぼしい。どの作中人物に「世十否定表現」が使用されるかを見ると、独自の存在感を印象づける表現になっていることが明らかである。次に示す。

夕顔・光源氏・末摘花・末摘花の兄・明石入道・玉鬘・髭黒の北の方・中君・薫・匂宮

物語内で高い評価を得る光源氏や薫、匂宮たちが居並ぶ一方で、資料18に記した末摘花や明石の入道、髭黒の北の方といった世間一般の価値観からは少々はみ出した人物に「世十否定表現」は使用されており、彼らの特異なありようはこの物語の読者なら誰しもよく知るところである。圧倒的な多数を占める否定表現と共起する「にる」は、「本来二者の外貌が同じように見えるという造形上の具体的な類似を表す」（『古典基礎語辞典』）ことを強く否定することと、同じく「似る」と解釈される「かよふ」とは異なり、他のものとは共通するところを持たない卓越性や独自性を示すところに、大きな働きがあると考えられる。つまり「にる」の表現価値はまさにそこに求められるべきであり、共起する各種の表現はその性質をより顕在化させるために機能しているのであった。

このほか、否定表現とともに共起するものとして「あやし」「たぐひなし」などが見られた。そうなる原因が不明であったり（「あやし」）、並ぶものがなく価値を侵すことができない（「たぐひなし」）とする表現もまた、孤高の存在であることを強くうかがわせる。否定表現と密に結びつく「にる」は、単なる類似を表現するのではなく、良くも悪くも似るものがないと否定することで、卓越性や独自性を印象づける表現価値を有していると考えられるだろう。ここまでを整理する。繋がっていることを意識させる二項間の共通性を表す「かよふ」に対して、本来はまったく

別もの同士を比較する「にる」は類似性を表している。そして「にる」にのみ確認できる運用として、「いとよく」や「世」および否定表現などの特定の表現とよく共起する。似ている場合は、優れた属性を持つ比較対象になぞらえることで卓越性や特異性を保証する。一方で否定表現を用いるものは、他に並ぶべき存在がないということで、やはり独自の存在感を保証する。つまり「にる」という語は一義的には類似性を表すが、それに加えて、卓越性や特異性といった独自であることを表現価値（周辺の意味）として含み持つていると考えられる。

六 本文の論理と解釈

ここまで検討、考察してきた「にる」と「かよふ」の表現価値の差異を、資料2や3の異同にあてはめると、次のように解釈できるだろう。浮舟と大君の場合は「かよふ」であれば両者が血縁であることを強調することになるし、「にる」であれば浮舟がいかに大君の美質を継承し独自の存在であるかを強調することになる。薫への中君からの新情報としては、どちらも新しい女君への動機付けとしては有効に機能するだろう。また薫の爪音と故致仕大臣のそれが似ていることも、「かよふ」ならば秘密の血筋をうかがわせて場面がにわかには緊迫することになる。他方「にる」ならば、かつて評判を取っていた故致仕大臣の爪音に「いとよく」似る薫の腕前は当代の和琴の名手としてその独自性や卓越性が保証されることになる。より適切なのはどちらかということ論じる以前に、それぞれの本文が選択する表現で破綻なく解釈ができる以上、本文としての正当性を云々するのは早計であると考える。

稿を閉じるにあたって、源氏物語の本文異同をどこまで「意味のあるもの」として受け取るべきかについて、もう一つの「にる」「かよふ」の異同である資料4を使って、いささか考えを述べておきたい。

宇治十帖の女主人公の一人として描出される中君は、父である八宮や姉の大君の生前はさほど目立つ存在ではなかつ

た。光源氏亡き後の新しい物語における中心的なテーマを引き受けるのは、父と姉の二人であり、中君は自らの人生を周囲の人々の思惑によって左右される受動的な立場でしかなかった。匂宮や薫との不如意な仲は、やがて主題化される可能性を示してはいたものの、総角巻までは顕著なものではなかった。それが一人宇治に残される早蕨巻以降、新たな展開を担う大きな役割を与えられると同時に、その外面内面の描かれ方もこれまでとは異なるものを見せるようになる。

【資料19】早蕨巻冒頭における中君の容姿や印象

(保) いとさかりに、ほひやかなる・・・おほむかたちの・・・すこしほそやき・・・

(大) いとさかりにほひおほくおはする人の・・・さまくの御物おもひにすこしうちおもやせ

たまえるしも・・・あてなると・・・まさりて・・・すこしおもほえたまひにたりさしなら
給へる・・・いとあてに・・・なまめかしき気色まさりて昔人にも・・・おほえ・たまへり・・・なら

ひたまへりしおりはとりくにて・・・かよひたまはさりし・・・をうちわすれては・・・それかと
ひ給へりし・おりはとりくにてさらにに・・・たまへりとも見えざりしをうちわすれてはふとそれかと

思わたされたまふに・・・

おほゆるまて・・・かよひ給へるを

早蕨巻以前の中君は大君との対照的な容姿・性格を取り沙汰されてきたが、姉の死後は一転してその類似性を強調されるようになる。資料19はその最初の記述となる。先の資料4の前後を含めてここに引用し直した。大島本、保坂本のいづれにおいても、今が盛りの美しさをみせることややや痩せたことで大君に似てきたこと、さらには生前は似ているように見えなかつたのに、今は姉の大君その人かと思ひえるほどであることなどが語られる。

かつてこのくだりにみえる「おもやせ」と「ほそやき」の類義語による異同を取り上げ、それぞれの語の使用状況から、相互置換可能な表現ではなく、明確に異なる論理に導かれたものとして読み取るべきものであることを指摘した。^⑧すなわち「ほそやぐ」は主に女性のみに使用される語であるのに対して、「おもやす」は男性・女性ともに使われること、また前者は物理的屬性として「痩せている」ことを示す一方で、後者はある条件下で「やつれている」という状態の変化を示している。両語の表現価値を鑑みると、保坂本では巻頭から「大君化した中君」を印象づける細身（大君の備えていた屬性）を語っており、他方、大島本では、父や姉を失うという特殊な条件下の中君が「やつれている」のであり、その証左として保坂本には見えない「さま／＼の御物おもひに」という原因をうかがわせる表現が要請されている。そしてこの資料19（資料4）には本稿で検討してきた「似る」ということを表す語として「にる」と「かよふ」の異同も確認できる。ここまでの考察を重ね合わせると、否定表現と共起することがなかつた「かよふ」が「ず」とともに使われる保坂本の本文にはやや不審があり、解釈としても血縁である姉妹に「通じ合っていない」「繋がついていない」とするのは飲み込みにくい。他方、大島本の本文では、姉の大君が中君とともに暮らしている頃は、姉妹といえども別の存在であり「似ている」ようには見えなかつた、しかし、死後になつて中君を見ると、確かに血縁を持つものとして「通じている」と語られており、「にる」「かよふ」の表現価値に照らしても無理のない解釈ができるであろう。

もちろんこの箇所をもつて、どちらの本文が優れていると断じるものではない。しかし、解釈の前提となる本文批

判と校訂のための基礎的作業として、そこに使用される語そのものの性質を予見を加えずに考え、それを本文の解釈に適用するのは、疎かにされるべきではない。⁽⁹⁾さらに本文の伝流や系譜の解明のためにも必要な作業である。

本稿で問題とした両語の意味を知るためには、源氏物語以外の作品の用例の悉皆調査が必要であることはいうまでもない。向後の課題として引き続き考えることとする。ご批評やご意見などいただければ幸いである。

(注)

- (1) 源氏物語の本文は『保坂本源氏物語』(おうふう)や『陽明叢書国書篇 源氏物語』(思文閣出版)、『大島本源氏物語』(角川書店)、『尾州家河内本源氏物語』(八木書店)などの公刊されている影印、複製本を主に用い、あわせて刊行会編『源氏物語別本集成 正・統』(おうふう)、池田亀鑑編『源氏物語大成』(中央公論社)、加藤洋介編『河内本源氏物語校異集成』(風間書房)などを参照した。なお翻刻本文には読みやすさを考慮して適宜句読点や括弧を付した。諸本の略号は『別本集成』『大成』にならう。

- (2) 拙著『源氏物語の本文と表現』(二〇〇四年)所収の「序」。

- (3) 源氏物語の伝本の系統については、長く池田亀鑑によつてものされた「青表紙本系」「河内本系」「別本」が使用されてきたが、近年はこの分類に疑義が示されるようになった。本稿でこの呼称を使用する場合は、あくまでも便宜的なものであることをお断りしておく。

- (4) たとえば小松英雄は『やまとうた』(一九九四年)において、「まよふ」「まどふ」「両語の特徴を次のようにまとめた。すなわち「複数の選択肢から一つを選択する決断がつかないことを表す。誤った選択の可能性を含蓄する「まよふ」に対し、「まどふ」は「明確な選択肢がなく、どうしてよいか判断がつかないことを表す」としている。判断がつかない状態にも質的な差異のあることがうかがえる。

(5) 「似る」「通ふ」に関連するものとして、以下のような論考があった。

藤川照三 『似る』・『通ふ』・『おぼゆ』 — 宇治十帖を中心にして — (『河』五、一九七三年六月)

藤川照三 『源氏物語における『似テイル』という表現について』 (『河』一三、一九七六年)

森脇茂秀 『動詞『似る』の意味用法について — 平安初・中期の仮名文を中心に —』

(『別府大学国語国文学』四六、二〇〇四年二月)

森脇茂秀 『静態動詞『似る』の一形式 — 『源氏物語』の用例を中心に —』

(『別府大学国語国文学』四九、二〇〇七年二月)

森脇茂秀 『平安時代における『静態動詞』の意味用法の一形式 — 『似る』と『すぐる』を中心に —』

(『別府大学国語国文学』五五、二〇一三年二月)

柳椿姫 『通ふ』の用法 — 『源氏物語』を中心として — (『筑波日本語研究』創刊号、一九九六年)

(6) 表一の「通ふ」の使用数は必ずしも「似る」という意のみではない。

(7) 否定辞の多用は森脇(二〇〇四)・同(二〇〇七)に指摘がある。

(8) 拙稿「保坂本源氏物語の本文と方法 — 早藤巻における独自異文を中心に —」(『源氏物語の本文と表現』二〇〇四年、所収)

(9) 工藤重矩は「国冬本源氏物語藤裏葉巻の本文の疵と物語世界 — 別本の物語世界を論ずる前提として —」

(『中古文学』第九二号、二〇一三年一月)において、次のような批判を掲げる。

近年の源氏物語別本研究における問題は、本文の疵による独自異文を、意図的な、何か意味のある本文として解釈しようとする傾向が強く見られることであろう。「各伝本がどのような物語世界を構築しているのか」の追究、「青表紙本と別本とは異なった物語世界が語られて」いることの例示を急ぐあまり、別本の本文解釈、

本文解釈において当然に為すべき手続き（本文の検討）が、疎かになっているのではないか、というのが諸氏の関連論文を読んでの率直な読後感である。

謝辞 本稿は、二〇一五年二月一九日に開催された「第2回 源氏物語の本文関係資料に関する共同研究会」

（於 國學院大學）における研究発表をもとに加筆修正したものである。この研究会の母体となる科学研究費補助金基盤研究（C）「源氏物語の新たな本文関係資料の整理とデータ化及び新提言に向けての共同研究」の研究代表者である豊島秀範氏および発表の際に種々のご教示を賜った方々に心より感謝申し上げる。